

AERA dot.

森喜朗は政界引退後もなぜ重用される？ スポーツ界で影響力を増した背景に何が

2021/02/15 11:32



© AERA dot. 提供 会長辞任を表明した森喜朗元首相 = 代表撮影 (C) 朝日新聞社

東京五輪・パラリンピック大会組織委員会の森喜朗会長が辞任し、ドタバタのトップ交代劇が続く。それにしてもなぜ、森氏はこれほど長く表舞台で活躍してきたのか。AERA 2021年2月22号から。

* * *

「私の不適切な発言が原因で混乱をさせてしまいました。誠に申し訳なく存じております」

東京五輪・パラリンピック大会組織委員会の森喜朗会長（83）による女性蔑視発言。森氏は1週間余りで辞任に追い込まれた。2月12日に開かれた組織委の合同懇談会で森氏は、冒頭のように謝罪した。

女性がたくさん入っている理事会は時間がかかる——。発言があったのは2月3日に開かれた日本オリンピック委員会（JOC）の臨時評議員会だった。一時は森氏を慰留する声があったというが、結局は辞任。後任は森氏本人の指名で元日本サッカー協会会長で現

< 1 2 3 4 >

[PR] おすすめ情報

PR taboola ▶



11万人待ちに怒り。業界激震のニューモファーマーズ



加齢による「記憶力の低下」、驚きの対策法...ニッスイ



「垂れ下がらないために」大人の男の必携アイテム 北の快適工房

には相談役の川淵三郎氏（84）の名前が挙がった。だが、後述する「森首相」誕生時の「密室会談」にも通じるやり方に、「透明性が確保されない」との批判が上がり白紙に戻った。

11日に報道陣の取材に応じた川淵氏によると、国際オリンピック委員会（IOC）のバスケ会長は森氏に、女性の共同会長を置くことを提案したというが、受け入れなかった。

川淵会長案が白紙に戻り、今後は国内外に新体制をアピールできる新会長の早急な人選を迫られる。

■ラグビーで早大に進学

森氏の話に戻したい。森氏は組織委が発足した2014年から会長を務め、官邸との調整役も果たした。首相経験者とはいえ疑問なのは、12年に政界引退後もなぜこれほど表舞台で重用されていたのかだ。その点を考える前に、まずは基本的な情報を押さえておきたい。

石川県根上町（現能美市）出身。ラグビーのために早稲田大学に進学するが、体調を崩して断念。その後、多くの政治家が輩出した雄弁会に入り、卒業後は政治家になるためのステップとして産経新聞社に入社した。

初当選は1969年で、文部（現文部科学）大臣などを歴任。00年、総理大臣だった小淵恵三氏が病に倒れると、急きょ、党の重鎮5人組による「密室会談」で後継に決まった。総理在任中は、「神の国」発言など失言を繰り返す。最終的に森内閣の支持率は調査によっては1桁にまで落ち込み、約1年の短命内閣となった。

今も重用される理由について、政治評論家の有馬晴海さんはこう指摘する。

「この国をどうにかしようとする人たちのために外堀を埋めることが得意で、五輪関係でも、陰で動いて手柄を人にあげられる人だから重宝されたのでしょう。目配りで生きてきたところがあり、知恵があるから自分自身が接着剤役になっているんな人たちをつなげていく。失言もありますが、人間力もなかなかです」

■粘って縁故入社する

有馬さんは、森氏の魅力として、具体的に「交渉術」や「処世術」を挙げた。

「産経新聞社への入社経緯や、初当選のときのエピソードなどから、そうした才能に若いころからたけていたのだと考えられます」

森氏の自伝『私の履歴書』（日本経済新聞出版社）でも、それらのエピソードに触れられていた。産経への入社の際は、縁故を使ったので安泰だと思っていたらしい森氏。ところがその年に限って採用がない旨をいったんは担当者から告げられるが、なんとか粘って入社にこぎつけたのだという。

初当選の際は、自民党の公認候補になれなかったにもかかわらず、知人のつてを頼りに安倍晋三前首相の祖父、岸信介元首相に石川の地元に入って応援してもらえるようお願いしたという。当時、羽田空港と小松空港を結ぶ路線はプロペラ機だったようで、悪天候で石川入りが実現しないことを心配した森氏は、負担はかかるが列車で来るよう、自ら交渉したようだ。そのおかげもあってか、選挙区でトップ当選を果たした。

「総裁選もせずに小淵恵三さんの後継になるなど、いつもギリギリのところであまくかすめ取ってきたのが森さんです。世の中を渡っていく知恵を蓄えているようです」（有馬さん）

■野党とのパイプも強い

自民党衆議院議員秘書の経験があるコラムニストの尾藤克之さんは、森氏が築き上げた幅広い人脈も強みと考える。

「永田町の住民は、与野党問わず森さんのことを悪く言う人はそれほどいません。野党とのパイプもとても強かった人で、自社さきがけ政権の発足時（94年）に、村山富市さんをおつかごとと裏でうまくネゴしていたのも森さんでした」

当時、羽田孜内閣が倒れて自民党は1年足らずで政権に返り咲いた。首相指名を巡り、森氏は社会党右派の山口鶴男氏（故人）から、社会党左派を取り込めばうまくいくという助言を受け、調整を進めた。

首相在任中から築いていたロシアのプーチン大統領との良好な関係も森氏の存在価値を高めているようだ。民主党政権時代には、当時の野田佳彦首相が森氏を頼り、ロシアへ異例の“野党特使”を送ろうとしたほどだ。

「脇が甘く失言もありますが、こうした人脈は森さんの強みとなっているでしょう」（尾藤さん）

前出の有馬さんによれば、森氏の人脈は政財界や芸能界、スポーツ界など、ありとあ

らゆるところに張り巡らされているという。ここでは特にスポーツ界での森氏の存在について触れておきたい。

■政治とスポーツの距離

スポーツジャーナリストの生島淳さんは、森氏がスポーツ界で影響力を増していった背景にあるのが「スポーツと政治の親和性」だと指摘する。

それを理解するために、40年前の出来事に触れておきたい。80年、ソビエトで開催されたモスクワ五輪では、前年のアフガン侵攻で、冷戦状態にあった米国がボイコットを世界に呼びかけた。対応は真っ二つに割れ、日本は米国に同調した。

当時、JOCは文部省所管の日本体育協会（現日本スポーツ協会）の中の一組織だった。国会議員も協会長を務めてきた経緯から、政治の影響も受けやすかった。生島さんによれば、その反省から、スポーツは政治から距離を置いて独立性を保つ流れがいったん強まり、JOCも89年に協会から独立。ところが、政治側はスポーツと手を組んでも損はなく、スポーツ側は競技力を保つために政治の力が必要だったという。

「利害が一致して再び距離を詰めていったのが世紀の変わり目くらいです」（生島さん）

文教族でスポーツ愛好家の森氏が日本体育協会長に就いたのは05年だ。その頃にはすでに両者の再接近が完成していたといい、16年の五輪招致に動いていた時期だった。「一連の時流に乗って森氏が影響力を増していったのだと考えられます」と生島さんは考える。

コロナ禍に振り回されたあぐく、組織委トップの交代劇でミソがついた東京大会。トップ交代で好転するか。「五輪の価値が随分と傷つけられたのが残念」。生島さんの言葉は、森氏や組織委に届くのだろうか。（編集部・小田健司）

※AERA 2021年2月22日号

おすすめのトピック



高血圧気になるなら「避けたい危険食品12...

PR NewSphere



NTTグループのリモートアクセスツール

PR NTTテクノクロス

こちらもおすすめ



BLOCK 2WAY WB

PR quiksilver.co.jp



BLOCK 2WAY WB

PR quiksilver.co.jp



BLOCK 2WAY WB

PR quiksilver.co.jp



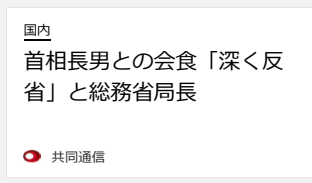
¥4,950 - BLOCK 2WAY WB

PR クイックシルバー



国内
春の「都をどり」中止に、
祇園甲部歌舞会

産経新聞



国内
首相長男との会食「深く反省」と総務省局長

共同通信



国内
「あの日」思い出し、声掛け合い避難所へ...「後悔しない行動を」「冷静にできた...

読売新聞



BLOCK 2WAY WB



日本での植毛費用はあなたを驚かせるかもしれません

